The Japanese Association of Special Education

特殊教育学研究, 38 (1), 85-90, 2000.

研究時評

聴覚障害児の文理解能力に関する研究の動向

我 妻 敏 博

I. はじめに

聴覚障害児の文理解能力についての研究は毎年数件ずつ発表されており、研究者や教育者がおのおのの立場や観点でテストや調査を行っている。日常の生活の中では純粋に文を理解する能力だけが独立に必要とされることは少なく、むしろ会話における文脈や場面の手がかりなどを利用して所与の文の命題を解釈することが多い。文理解能力を分析、評価しようとすれば、より日常に近い状況で研究されるべきであろう。しかしそのような状況下ではさまざまな要因が入り込んでしまい、文の理解能力だけを明確にすることは困難である。したがって、発表されている研究の多くは文理解のある側面に焦点を当てている。また、刺激となる文を口頭（聴覚口話や指文字、キュード・スピーチなど）で提示するか、文字で提示するかも問題になるが、前者は実験者による伝達の確実性に不安があるため、文字による提示が採用される場合がほとんどである。ここで紹介する文理解能力に関する研究も、ほとんどすべて刺激文は文字によって提示し、回答は絵画選択式や筆記式によって求める方法を採用している。ここではそれらを、文理解能力全般に関する研究、ある特定の文型に対する理解能力に関する研究に分けて概括する。

II. 文理解能力全般

1. 文理解能力の一般的な傾向

清木・菅原・今井（1978）は聾学校小学部児童を対象に文の理解能力を絵画選択方式で調べた。テスト文は受身文、もらい文、二重否定文など、聴覚障害児にとって理解しにくいといわれている文である。成績は非常に低いものであったが、誤反応の分析から、聾学校児童は文法的な知識が不十分であるほかに、自分の経験を手がかりに文を解釈する傾向が強いことが報告されている。草薙・都築・板橋（1978）は聾学校小学部2〜4年生と普通小学校1〜4年生を対象に単語の語彙的側面と文法的側面の両側面から文理解能力を分析する目的で文理解テストを実施した。その結果、聾学校小学部児童の成績は普通小学校3年生のレベルで停滞しており「9歳レベルの壁」がみられた。反応傾向として、聾学校児童は単語と文法の両面から文を解釈するのではなく、文中の単語の意味を手がかりに「単語読み」的に文を理解する傾向があったとしている。川口・板橋・都築（1981）は上記の研究方法で慣用表現についてさらに調査した結果、上記の研究と同様な結果が得られた。慣用句の指導では理解の容易な単語に置き換えて指導することがあるため、表面的な理解にとどまってしまうという弊害があるのではないかと考察している。

このほかにも、聴覚障害児の文理解能力に関する実験・調査の結果報告は多くみられるが、それらをまとめると、次のようになる。

① 聾学校児童の文理解能力は普通小学校3年生のレベルで停滞する傾向がある。

② 文理解の方略については、文法的な知識の不足から、自分の経験や単語の意味を手がかりに文を解釈する傾向がある。

これらは経験的に知られていることではあるが、データを収集して数値で示すことにも意義があると考える。

2. 文脈の理解

聴覚障害児は語彙量が少なく、それも文理解の妨害要因になっている。文中に未知の単語があった場合、前後関係からその意味を類推できることも文理解のための重要な要因と考えられる。

蓑毛（1981）は聾学校小学部3年生と普通小学校2、3年生を対象に、算数の加法、減法の文章題の理解テストを実施した。分析の観点は文理解と文脈理解であった。加法、減法の文章題ではキーワードの理解が文章題の理解に関係してくることがわかり、また、「X－AはBである。Xはいくつか」というような逆型の文章は理解困難であったと報告している。算数の文章題を題材にした文理解能力に関する最近の研究と

上越教育大学学校教育学部障害児教育講座

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Special Education

してはこのほかに川原・南出（1992）の研究や南出・北畑・宮原・須藤（1995）の研究がある。算数文章題を解くためには、問題そのものを理解する能力が前提となるため、聴覚障害児にとって算数文章題は困難な課題になっている。

文脈の理解について、岡田らは主にクローズ法により一連の研究をしている。岡田・高橋・都築・保坂（1979）は聾学校小学部2年生から高等部1年生までの児童生徒と普通小学校2年生を対象に、クローズ法により、文の文節を穴埋めさせるテストを実施した。その結果、聾学校児童生徒は文脈をうまく利用できず、前後の単語や句と関連するが文全体では意味の通じない不適切なことばを記入する傾向があった。次に岡田（1980, 1981）は聾学校中学部と高等部の生徒を対象に文字のレベルでクローズ法による穴埋めテストを実施した。その結果、文字の穴埋めより文節レベルでの穴埋めのほうが正答率が低かった。さらに岡田（1982）はある文節を読み、次の文節を予測するという課題を聾学校中学部1、2年生を対象に実施した。その結果聾学校生徒は無記入と全く意味の通じない記入が多く、文脈を利用できないことがわかった。岡田（1983）はさらに聾学校中学部生徒を対象に、文節の穴埋め能力と読解力の関係を調べた。文章の大意や主題をよく理解できた生徒は文節穴埋め課題の成績も高かった。岡田はそのほかにも聴覚障害児の文脈利用能力の調査を行っているが（1984）、いずれの研究でも、聴覚障害児が文脈を把握したり、前後関係からことばを類推する能力に問題のあることが示されている。

3. 心理学的な能力と文理解能力の関係

南出・進藤（1984）、南出（1987）は文中のことばの文法的な関係を直感的に把握できるかどうかを統語能力のひとつとして捉え、聾学校小学部4年生から高等部3年生までの児童生徒を対象に例文中の2つのことばの関係と同じ関係にあることばを問題文中から探させる文法関係把握テストを実施した。同時に概念関係把握テストも実施した。概念関係把握テストはITPAの「絵の類推」を参考に作られた。文法関係把握テストの結果から、高等部になっても4割強の生徒が統語構造を獲得できていないことがわかった。南出らはその原因として、表層構造的な同位置反応がみられたこと、文法関係が把握できないことを挙げている。また、概念関係把握テストと文法関係把握テストでは片方の成績が高ければもう片方の成績も高いという傾向はみられたが、有意な相関関係はなかった。

都築・佐藤（1983）は文理解と認知的枠組みの関係を聾学校小学部児童を対象にしたテスト結果から検討している。実施したテストは文理解課題とWISC-Rの絵画配列課題であった。文理解課題では「～の前に」「～の後に」が使われた文を提示して動作させた。テストの結果、絵画配列課題で高い得点を示した児童は文理解課題でも高い成績を示し、認知的枠組みの発達と文理解能力の関係が強いことが示唆された。認知的枠組みと文理解の関係については上野・原田・林部（1976）の研究の中でも述べられている。聴覚障害児の文理解能力に関する心理学的な観点からの研究がより多くなされ、文理解のメカニズムが少しでも解明されれば，指導の領域にとっても有益な情報をもたらすであろうと考えられる。

意味情報との関連で文理解能力を分析する研究もみられる。丑尾・高橋（1994）や相澤・吉野（1996, 1998）の研究である。これらの研究は文理解そのものを扱った研究ではないが、後者は文を理解する際、統語的情報と意味的情報の関与のあり方を分析しており、新しい視点が導入されている。

4. 手話の影響

手話、指文字が徐々に聾学校教育の中に取り入れられはじめている。もともと手話や指文字の使用は聾学校中学部や高等部では黙認されており、手話を積極的に使う教師も多い。そこで、言語発達に手話の使用がどのように影響するかというテーマは現在非常に重要なテーマになりつつある。しかしながら、手話の使用が文理解にどのように影響するかについての研究は非常に少ない。

冷水（1988a, 1988b）は聾学校小学部3～6年生を対象に、文理解能力と手話や身振りによる表現能力の関係について検討した。文理解の能力は、検査文の意味を表している絵を2～5選択絵から選ぶ課題で調べた。テストの結果、学年の進行にともなう正答率の上昇は一部にしかみられなかった。2～3語文の成績は高かったが4語以上の文、重文、関係節構文などの正答率が低く、文の始めに出てくる有生名詞を動作主と解釈する傾向があった。手話表現能力は物語性のある絵を対象児に見せて手話または身振りを使って説明させた。表現された手話、身振りを映像性と象徴性、規約性と即興性の観点で評価した。文理解テストの結果と手話、身振りの評価結果を分析した結果、手話使用は文理解能力に悪影響を及ぼさないと報告している。今後この分野での研究の必要性はますます増大するであろうと思われる。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Special Education

III. 特定の文型に焦点を当てた研究

聴覚障害児にとっていくつかの理解しにくい文型のあることが経験的に知られている。ここではある特定の文型に焦点を当てた研究を検討する。

1. 受身文、授受構文、複文の理解

聴覚障害児は受身文や複文の理解に困難を示すことが、経験的にも研究的にも明らかになっている。聴覚障害児の受身文や複文の理解に関する研究は数多く行われており、これらの構文は心理学的な操作を必要とすることから、言語心理学的な観点からの研究も多い。

今井、菅原らは聾学校児童生徒の文理解能力についてさまざまな調査を実施している。まず、聾学校小学部から高等部までの児童生徒を対象に、絵画選択方式で文理解能力を調査し、使役文、受身文、否定文において正答率の低い傾向を見い出した（今井・菅原・荒川・清木, 1978, 清木ら, 1978）。さらに、菅原・今井・荒川（1978）は聾学校小学部1年生から高等部2年生までの児童生徒と普通小学校児童を対象に、絵画指示方式によって文の理解能力を調べた。その結果、聾学校児童生徒は非常に低い正答率を示し、学年進行による正答率の上昇も認められなかった。正答率の低かった構文は使役文、受身文、二重否定文などであった。板橋（1982）は9〜15歳の聾学校児童生徒と11、12歳の健聴児を対象に、受身文とそれに対応する能動文の理解能力を玩具を操作させる方法で調べた。健聴児は受身文、能動文ともに90%以上の正答率を示したが、聾学校児童生徒では能動文で64%、受身文で59%であった。使った動詞は「押す、引く」の2つだけであったため、能動文と受身文の正答率にあまり差がみられなかったが、それでも健聴児の結果と比較すると聾学校児童生徒の正答率は低い。保坂・須藤（1977）は聾学校中学部生徒と普通小学校2年生を対象に、絵を手がかりにして1つの複文を2つの単文に書き直す課題と2つの単文を1つの複文に書き直す課題を与えた。その結果、聾学校中学部生徒と普通小学校2年生の成績が同等であった。

受身文、授受構文、複文の理解に関する、より心理学的な側面からの研究として、言語心理学的観点からの研究がある。脇中（1984）は聾学校小学部児童と同年齢の健聴児を対象に授受構文の理解能力を調べた。テスト方法は上記の小川・三矢（1980）の研究と同様である。聾学校児童の成績は「あげる」文に比べて「くれる、もらう」文の成績が低く、普通小学校1、2年生と同等あるいはそれ以下であった。反応の傾向から、聾学校児童では語順方略を使った者と主語を行為者と解釈した者が多かった。我妻・菅原・今井（1980）、我妻（1981）も聾学校児童を対象に受身文、やりもらい文の理解テストを実施し、受身文、もらい文において特に成績が低い結果を得ており、反応の分析から、「が名詞句」を動作者と解釈する傾向が強いことを確認している。我妻（1986, 1990a, 1990b）はさらに文理解の方略という観点で研究を進め、聴覚障害児は上記の傾向のほかに語順を手がかりにする傾向などからいくつかの方略を見いだしている。また、小田島・都築・草薙（1983）は聾学校の小学部4年生から中学部3年生までの児童生徒を対象に、「受身文、やりもらい文」の理解能力と、視点に関するテストを実施し、視点を定めて事態を認識する能力と文の理解能力の関係を検討した。文理解力テストの結果は「受身文、もらい文」の正答率が低いことを示したが、視点をどこに置くかということと「受身文、やりもらい文」の理解成績とは関係しており、聴覚障害児は視点を適切に置けないこともこれらの文の理解を妨げていると考察している。このように、受身文や授受構文理解の要因として、文法的な知識や行為の方向性の認識のほかに、自分をどの立場に置くかあるいはどのような視点で事態を把握するのかという要因が考えられる。複文について上野ら（1976）は小学校5、6年生と中学校1、2年生の聴覚障害児を対象に、ぬいぐるみの人形を操作させる方法で関係節構文の理解能力を調べた。その結果、聴覚障害児は①文の基本的な枠組みである「主語、目的語、動詞」が定着していないこと、②他動詞なのに自動詞的な解釈をしてしまうこと、③「が名詞句」を動作者と解釈してしまう傾向が非常に強いことを見いだした。大沼（1976）の授受構文や関係節構文を検査文とした同様な調査でも、上野らの研究と同様な結果が示されている。小川・三矢（1980）は難聴学級で指導を受けている児童生徒と普通小学校1、3、5年生を対象に複文の理解能力を調べ、反応傾向から文理解の方略を検討した。方法は、絵と組になっている4つの文から、絵の意味を表している文を選ばせた。その結果、難聴学級児童では①文中の意味的関係を手がかりとする方略、②文の左から右へ順に名詞、動詞を組み合わせて解釈する方略、③等位接続文と同様に意味を解釈する方略、の3つの方略を使っていると報告している。また、我妻・藤本（1994）は聾学校児童を対象に複文理解の方略という観点で絵画選択方式の文理解テストを実施している。反応の分析から、複文を2つの単文のように解釈する傾向や文中の動詞の左側にある

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Special Education

もっとも近い名詞をその動作者とする傾向などいくつかの方略を見いだしている。

文理解を方略という観点から研究する手法は文理解能力の心理学的な側面からのアプローチということだけではなく、指導との関連からも意味のあることであり、さらなる研究が期待される。

2. 存在文、条件文、可能文、比喩文、掲示文の理解

聴覚障害児の文理解能力に関する研究で、文レベルに焦点を当てた研究では、前述のごとく、受身文、授受構文、複文に関したものが多いが、ほかにいくつかの文型に関する研究もある。

植村（1978）は18〜24歳の聴覚障害者を対象に「コップの上にスプーンがある」のような存在文の理解能力を調べた。方法は絵と文の結合である。テスト文は正常な語順の文と語順を変換した文、否定文、意味的に合理的な文と不合理な文を用いた。その結果、語順等の影響は成績に影響しなかったが、意味的に不合理な文に対する正答率が低い結果が得られた。聴覚障害者の場合、文の文法的な側面よりも経験をもとにした意味的な側面が文理解に強く影響していることを示唆するものである。

都築（1981）は聾学校高等部の生徒を対象に条件文の理解能力を調べ、先行研究の健聴児の結果と比較した。方法は、「もし雨が降れば必ず地面はぬれます」のような条件文とその前提文「雨が降りました」を提示し、前提文の後に続く文を6つの文から選ばせた。その結果、聾学校高等部の成績は普通小学校3年生と同様な成績であった。条件文が理解できなかった原因として都築は①条件文の一部を知覚的、直感的に認知してしまうこと、②前提文が否定文の場合の理解が困難だったこと、を挙げている。

寺島・真野（1987）は聴覚障害者が可能文を理解しにくいことから、聾学校小学部4年生を対象に可能文の指導を試みている。指導に際して、構造図を示したり、ビデオで場面を見せることによって文の意味が理解しやすくなり、有効な指導ができると述べている。

聴覚障害児の理解困難な文の種類に比喩文がある。比喩表現や比喩文の理解については澤らの研究がある。澤・須藤（1989）は聾学校小学部4年生から中学部3年生までの児童生徒と普通小学校1〜3年生を対象に比喩表現の理解能力を調べた。その結果、聾学校中学部3年生でも普通小学校1年生の正答率に達していなかった。比喩表現理解の困難な原因として、聴覚障害児はことばの意味を一義的、固定的に理解しており、柔軟な意味解釈ができないからではないかと考察している。澤・須藤（1990）はさらに聾学校小学部高学年から高等部までの児童生徒と普通小学校1、2、4、6年生を対象に比喩文の理解テストを行い、比喩文理解の困難性の要因を検討した。方法は比喩文を示してその意味を表している文をいくつかの選択文から選ばせるというものであった。正答率では、聾学校高等部でも普通小学校4年生に達していなかった。反応の分析の結果、単語の多義性の習得不足と統語能力の遅滞の両面に問題のあることが示された。以上のように、比喩表現の理解不足については、文法的な側面に加えて、文中の単語の語彙的な側面でのつまずきも要因と考えられるが、同時に、比喩表現を学習する経験が不足しているためとも考えられる。澤らはその後も聴覚障害児の比喩文の理解について一連の研究を行っており（澤・吉野, 1994, 1995a, 1995b, 1995c, 1996, 1998）、さまざまな側面から研究を進めている。比喩文の理解は単なる文の理解を超えた、抽象化や概念の操作などの能力を要するものであり、聴覚障害児の文理解能力を複雑で高度な心理的・社会的能力との関連で分析できる対象である。また、教科学習との関連も強いものと思われる。

土肥・菅原（1985）は聾学校小学部4年生から高等部までの児童生徒と普通小学校6年生を対象に、日常よく見かける掲示文の理解力を調べた。課題は掲示文に対して5つの選択文からその意味を表す文を1つ選ぶことであった。聾学校児童生徒では学年進行にともない正答率が上昇したが、それでも聾学校高等部で普通小学校6年生と同等の成績であった。阿部（1985）は聾学校中学部生徒を対象に公園にあるポスターの文の理解について調べたが、文の理解に困難さがあることを報告している。このように、日常目にする文の理解においても聴覚障害児は困難さをもっている。

日常生活に密接に関連する文型を取り上げての研究は聴覚障害児の日常会話の促進のためにも重要である。また、研究結果を実際の指導に役立たせることも重要であろう。

IV. 今後の課題

以上、聴覚障害児の文理解能力についての比較的最近の研究を概観した。より詳細については我妻(1998)を参照されたい。かなり大雑把な傾向としては、1980年代までは聴覚障害児の文理解能力の実態の分析がさまざまな観点から分析され、1990年代になると、研究テーマがより細分化され、より心理学的な観点からの基礎的な研究が多くなったという印象を得るのであ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Special Education

る。また、文理解能力に関係する研究として助詞や動詞などに着目した研究、記憶との関連、情報処理という観点からの研究なども行われている。

現在、聾学校に在籍する児童・生徒は少人数化、重度化、重複化が進んでおり、このような子どもたちに対する指導の在り方が問題になっている。文理解能力に関する研究において今後多くの対象児からデータを収集して分析するという方法ばかりではなく、言語能力に深刻な問題をもつ聴覚障害児を対象に文理解能力の獲得やその指導法などについてもっと個に即した研究方略が要求されてくるのではなかろうか。聾学校とは裏腹に普通学校に通う重度の聴覚障害児が増えつつあるが、そのような子どもたちの文理解能力がどのようになっているのか。健聴児に囲まれた言語環境の影響はどのようなものなのかについても今後研究される必要があろう。

また、現在わが国の聾教育界では手話を学校教育に取り入れるかどうかが大きな問題になっている。実際教室で手話を使用して教育している聾学校も増えつつある。文理解能力に関する研究においても、今後手話の影響がどのようなものかに焦点を当てた研究が必要になってくるであろう。

文　献

相澤宏充・吉野公喜（1996）聴覚障害児の単文処理における意味的情報. 日本特殊教育学会第34回大会発表論文集，96-97.

相澤宏充・吉野公喜（1998）聴覚障害児の文法性判断における意味情報の役割. 心身障害学研究，22, 19-27.

阿部和郎（1985）身近な日常生活用語の理解と行動化をめざして. 第19回全日本聾教育研究大会研究集録，99-100.

我妻敏博・菅原廣一・今井秀雄（1980）聴覚障害児の言語能力＜III＞―うけみ・やりもらい文の理解―. 国立特殊教育総合研究所研究紀要，7, 39-47.

我妻敏博（1981）聴覚障害児におけるうけみ文・やりもらい文の理解. 聴覚障害，36 (5), 15-21.

我妻敏博（1986）聴覚障害児の文理解方略に関する考察. ろう教育科学，28 (1), 30-38.

我妻敏博（1990a）聴覚障害児の文理解方略に関する一考察（その2）. ろう教育科学，32 (1), 33-46.

我妻敏博（1990b）聴覚障害児の文理解方略に関する一考察（その3）. 聴覚言語障害，19 (2), 41-51.

我妻敏博・藤本文子（1994）聴覚障害児の複文理解方略に関する一考察（その1）. 聴覚言語障害，23 (1), 1-12.

我妻敏博（1998）聴覚障害児の文理解能力の研究. 風間書房.

土肥光史・菅原廣一（1985）聴覚障害児の社会生活言語の理解―掲示文を中心として―. 日本特殊教育学会第23回大会発表論文集，64-65.

保坂真理・須藤貢明（1977）ろう児の構文能力（2）―文の統合と分解―. 日本特殊教育学会第15回大会発表論文集，224-225.

今井秀雄・菅原廣一・荒川哲朗・清木　隆（1978）絵画指示方式による言語能力検査法の検討―聴覚障害児への適用―. 音声言語医学，19 (1), 71-72.

板橋安人（1982）聴覚障害児の受け身文理解における言述場面の発達的検討. 聴覚言語障害，11 (4), 125-132.

川口　博・板橋安人・都築繁幸（1981）聴覚障害生徒における慣用表現の理解について. 日本特殊教育学会第19回大会発表論文集，64-65.

川原靖子・南出好史（1992）聴覚障害児の言語能力と算数文章題の解決能力. 日本特殊教育学会第30回発表論文集，48-49.

草薙進郎・都築繁幸・板橋安人（1978）聴覚障害児の文理解に関する研究―単語の連想関係と syntax を中心にして―. 日本特殊教育学会第16回大会発表論文集，46-47.

南出好史（1987）聾生徒の思考と言語能力の関係. ろう教育科学，29 (1), 1-9.

南出好史・北畑恵理・宮原奈保美・須藤史子（1995）聴覚障害児による算数文章題の解決過程. 聴覚言語障害，22 (4), 65-79.

南出好史・進藤　広（1984）聾学校生徒の統語能力の評価に関する研究. 聴覚言語障害，13 (4), 165-172.

蓑毛良助（1981）聴覚障害児の文章題理解の構造. 日本特殊教育学会第19回大会発表論文集，70-71.

小田島牧子・都築繁幸・草薙進郎（1983）聴覚障害児の受け身文，やり・もらい文の理解に及ぼす話者の「視点」の影響. 聴覚障害，38 (2), 12-23.

小川　仁・三矢恵子（1980）聴覚障害児の関係節文の理解. 日本特殊教育学会第18回大会発表論文集，206-207.

岡田　明（1980）聴覚障害児の読みに及ぼす文脈の影響―その3―. 日本特殊教育学会第18回大会発表論文集，212-213.

岡田　明・高橋信雄・都築繁幸・保坂真理（1979）聴

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Special Education

覚障害児の読みに及ぼす文脈の影響(その2)―文章の位置によるクローズ反応の分析―．日本特殊教育学会第17回大会発表論文集，356-357.

岡田　明（1981）聴覚障害児の読みに及ぼす文脈の影響（その5）．日本特殊教育学会第19回大会発表論文集，66-67.

岡田　明（1982）聴覚障害児の読みに及ぼす文脈の影響（その6）．日本特殊教育学会第20回大会発表論文集，372-373.

岡田　明（1983）聴覚障害児の読みに及ぼす文脈の影響（その7）．日本特殊教育学会第21回大会発表論文集，338-339.

岡田　明（1984）聴覚障害児の読みに及ぼす文脈の影響（その8）．日本特殊教育学会第22回大会発表論文集，88-89.

大沼直紀（1976）関係把握についての構文理解力の診断と指導．第10回全日本聾教育研究会研究集録，148-150.

澤　隆史・須藤貢明（1989）聴覚障害児の比喩の理解とことばの多義性．日本特殊教育学会第27回大会発表論文集，68-69.

澤　隆史・須藤貢明（1990）聴覚障害児の比喩文の理解の発達について．日本特殊教育学会第28回大会発表論文集，42-43.

澤　隆史・吉野公喜（1994）聴覚障害児の比喩文理解に関する実験的検討．特殊教育学研究，31 (4)，19-26.

澤　隆史・吉野公喜（1995a）聴覚障害児の比喩文理解と読みの能力．ろう教育科学，37 (3)，119-132.

澤　隆史・吉野公喜（1995b）聴覚障害児の比喩文理解と言語的枠組みの形成．特殊教育学研究，33 (2)，21-30.

澤　隆史・吉野公喜（1995c）聴覚障害児の比喩文理解における単語の知識の影響―趣味，媒体の既知度と根拠の理解との関係から―．心身障害学研究，19，23-32.

澤　隆史・吉野公喜（1996）聴覚障害児の比喩文理解と比喩文の修辞性との関連．日本特殊教育学会第34回発表論文集，106-107.

澤　隆史・吉野公喜（1998）聴覚障害児の比喩文の解釈について―パラフレーズ法による分析から―．日本特殊教育学会第36回大会論文集，66-67.

清木　隆・菅原廣一・今井秀雄（1978）聴覚障害児の言語能力の検討．日本特殊教育学会第16回大会発表論文集，58-59.

冷水来生（1988a）聴覚障害児における文理解の発達．特殊教育学研究，25 (4)，21-28.

冷水来生（1988b）聴覚障害児の文理解の発達と手話表現能力の関係について．特殊教育学研究，26 (1)，13-21.

菅原廣一・今井秀雄・荒川哲郎（1978）聴覚障害児の言語能力＜II＞―検査法の検討―．国立特殊教育総合研究所研究紀要，5，89-97.

寺島鈴子・真野　功（1987）可能文の産生指導．第21回全日本聾教育研究大会研究集録，156-157.

都築繁幸（1981）聴覚障害者の条件文理解について．聴覚障害，36，4-16.

都築繁幸・佐藤至英（1983）聴覚障害児の文理解に及ぼす認知的枠組みの影響．特殊教育学研究，21 (2)，1-5.

植村英晴（1978）聴覚障害者における存在文の理解．日本特殊教育学会第16回大会発表論文集，48-49.

上野田鶴子・原田信一・林部英雄（1976）聴覚障害児の言語運用における文構造．日本音響学会聴覚研究会資料，H-39-9.

丑尾寧子・高橋信雄（1994）語彙の意味概念の拡がりが文理解に及ぼす影響について．日本特殊教育学会第32回発表論文集，48-49.

脇中起余子（1984）聴覚障害児の授受構文理解の発達的特徴について．ろう教育科学，26 (2)，97-110.

―1999.2.1 受稿，1999.12.11 受理―

NII-Electronic Library Service